



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日本古典文学史

高文汉 编著

 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学史 / 高文汉编著. —上海: 上海外语教育出版社, 2007
(新世纪高等学校口语专业本科生系列教材)

ISBN 978-7-5446-0621-9

I. 日… II. 高… III. 古典文学—文学史—日本—高等学校—教材
IV. I313.09

中国版本图书馆CIP数据核字(2007)第180619号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 上海叶大印务发展有限公司

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 890×1240 1/32 印张 11.125 字数 302 千字

版 次: 2007年12月第1版 2007年12月第1次印刷

印 数: 3 500 册

书 号: ISBN 978-7-5446-0621-9 / I · 0028

定 价: 27.00 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材编委会

总主编：

谭晶华

编委：（以姓氏笔画为序）

王 勇	浙江工商大学
王健宜	南开大学
叶 琳	南京大学
皮细庚	上海外国语大学
许慈惠	上海外国语大学
纪太平	厦门大学
杨诒人	广东外语外贸大学
严安生	北京外国语大学
吴 侃	同济大学
吴大纲	上海外国语大学
陈 岩	大连外国语学院
张 威	清华大学
陆留弟	华东师范大学
庞志春	复旦大学
胡振平	解放军外国语学院
修 刚	天津外国语学院
洪栖川	东北师范大学
高 宁	华东师范大学
高文汉	山东大学
宿久高	吉林大学
谭晶华	上海外国语大学

总序

21 世纪是一个国际化的高科技时代,也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展,新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地,就要占领人才培养的制高点,培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势,以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家,但是高校外语专业的教学必须从过去的“经院式”人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生,还需要思维敏捷、心理健康、知识广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到,对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度,提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大,日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得不小的成绩,各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准,同时对日语学科的建设也提出了新的要求,因此,日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流,开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外语教育出版社(外教社)以高度的责任感和高瞻远瞩的视野,在充分调研的基础上,抓住机遇,在 2003 年 8 月邀请了全国主要外语院校和教育部重点

综合大学日语专业的近二十位专家在上海召开了“全国高等学校日语专业本科生系列教材编写委员会会议”。代表们完全认同编写“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的必要性、可行性及紧迫性，并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后，外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议，分头撰写编写大纲，确定教材类别、项目，讨论审核样稿。经过两年多的努力，终于迎来了第一批书稿的付样。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、语言学与翻译(中日对译)、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干板块，可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原则，深入浅出，反映各个学科领域的最新研究成果；编写体例采用国家最新有关标准，力求科学、严谨；编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上，培养学生分析和解决问题能力的原则，全面提高学生的人文、科学素养，使其养成健康向上的人生观，成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界的学者专家，其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定，有的是从数种候选教材中遴选，总体上代表了中国日语教材学发展的方向和水平。我们相信，外教社这套“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的编写和出版，一定会促进和提高我国日语专业本科教学质量的稳步提高，其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学常务副校长

2006.5

はしがき

本書は、主に大学生向きの教科書に適するように編著した。それに院生やその他の日本古典文学史に興味のある方も独学できるように心がけた。

本書は、四章二十一節からなっている。教科書として教授する場合、週に二時間の割合で、一年間必要である。

利用者が日本古典文学発展の主脈を容易に把握できるように、各章の初めにそれぞれ一節を設けて、時代ごとの文学発展の大勢、即ち社会的文化的背景、主な文学思潮・美意識・文学様式及びその特徴、代表的な作家とその作品、並びにそれら相互の関係などをなるべく体系的に概観しようとした。そして、文学様式に基づき、章ごとに幾つかの節に分けて、それぞれの歩みやその特有の展開理法、有機的な諸関係を模索した。なお、代表的な作品をよく読解できるように、その抜粋を引用した後、現代日本語での訳文を付した。各節を総合的に復習できるように、それぞれ練習問題も出しておいた。

編著にあたって、出来る限り日本古典文学発展の真実に近づけようと努力した。ご存知の通り、日本古典文学は、和文学と漢文学という二つの流れからなっている。しかも漢文学は、ずっと正統な文学として重視されてきた。それにもかかわらず、今まで出版された日本古典文学史は、漢文学を最小限に抑え、その論述がきわめて不十分だと思う。和文学と漢文学は、絡みながら発展してきたものである。漢文学の歩みやその本質を究めなければ、和文学の表現法や

美意識の変遷などを解明することは不可能であると考え。それゆえ、本書は漢文学についての叙述を増やし、その不足を満たそうと図った。

時間の都合もあり、ことに筆者の不勉強で、本書には誤りや、不適當な所は少なくないと存じるが、皆様にご教示をお願いしたい。

本書の最終稿を赤松進先生に目を通していただき、ここに深い感謝の意を表す次第である。

高文汉

2007. 5

目次

第一章 古代前期の文学

第一節 時代の概観	1
一、時代区分と歴史的背景	1
二、口承文学から記載文学へ	3
第二節 記載文学の興り	5
一、神話・伝説・説話	5
二、史書や地誌の編纂	9
三、祝詞・宣命	16
第三節 詩歌	20
一、上代歌謡	20
二、『万葉集』と歌学の芽生え	22
三、漢詩文	30

第二章 古代後期の文学

第四節 時代の概観	39
一、時代区分	39
二、平安文学形成の基盤	40
第五節 漢文学	45
一、漢文学の隆盛	45
二、漢文学の衰退	62
第六節 和歌・歌謡	77
一、『古今和歌集』	77
二、『後撰集』その他	82

三、歌謡・雑芸の世界	88
第七節 物語	91
一、作り物語	92
二、歌物語	95
三、『源氏物語』	98
四、平安末期の物語	103
第八節 日記・随筆	109
一、『土佐日記』	110
二、『蜻蛉日記』その他	112
三、『枕草子』	116
第九節 歴史物語・説話文学	121
一、歴史物語	121
二、説話文学	123

第三章 中世の文学

第十節 時代の概観	127
一、時代的背景	127
二、中世文学の展開	130
第十一節 和歌と連歌の隆盛	136
一、『新古今和歌集』	136
二、「十三代集」その他	144
三、連歌の隆盛	152
四、俳諧の連歌	156
第十二節 物語・説話	160
一、擬古物語・御伽草子	160
二、歴史物語と史論	164

三、軍記物語	168
四、説話文学	179
第十三節 随筆・日記・紀行	188
一、随筆その他	188
二、日記と紀行	199
第十四節 劇文学・歌謡	205
一、能楽・狂言	205
二、歌謡	211
第十五節 漢文学	213
一、禪林文学の勃興	213
二、五山文学の隆盛	217
三、禪林文学の衰退	233

第四章 近世の文学

第十六節 時代の概観	237
一、庶民文学の普及	237
二、近世文学の展開	239
三、時代思潮と文学の特色	241
第十七節 近世小説	244
一、仮名草子	244
二、浮世草子	247
三、読本	255
四、洒落本その他	262
第十八節 俳諧・川柳・狂歌	272
一、俳諧の展開	272
二、川柳・狂歌	292

第十九節 国学・和歌	301
一、国学	301
二、和歌	304
第二十節 漢文学	311
一、漢文学の復興	311
二、その流れと代表的詩人	314
第二十一節 劇文学	331
一、浄瑠璃	331
二、歌舞伎	336
 参考書目	 342

第一章 古代前期の文学

第一節 時代の概観

一、時代区分と歴史的背景

日本文学史の上で、日本の文学が発生してから、平安京に奠都をみた延暦^{えんりやく}十三年(794)以前の文学を、一般に古代前期の文学という。日本の政治、文化の中心が大和地方にあったころの文学であるから、大和時代の文学とも呼ばれる。また、上古文学、上代文学とも言われる。

日本列島に人間が住むようになったのは何時のことであるかは、未だ明らかにされていない。ただ新石器時代のある時期からそこに人がいたこと、複雑な混血を経て現在の日本民族の祖先が形成されたくらいのことしか言えないのである。新石器時代の住民たちは、縄文式土器や石斧などをもち、狩猟や採集の生活を営んできた。その後、長く続いた縄文式文化を経て、紀元前三世紀頃水稻耕作の技術をもった弥生時代になると、各地に大小の集落が形づくられ、次第に氏族中心の小国家が生まれた。三世紀後半か四世紀前半かには、それらも皇室を中心とする大和朝廷に組み入れられて、祭祀的氏姓制の統一国家となるに至った。

その不安定な氏姓制国家政権を固めるため、大和朝廷は積極的に外来の文化を吸収した。六世紀の中葉に仏教を取り入れ、七世紀のはじめに聖徳太子は遣隋使を派遣して、中国文化の導入と仏教の興

隆に努め、また『十七条憲法』^①を制定して天皇中心の国家意識を強調した。ついで大化の改新が断行され、七世紀後半、天皇を絶対とする律令制、公地公民の中央集権国家が完成された。こうして政治体制が整えられると同時に、文化面でも格調の高い飛鳥文化や白鳳文化が現れ、やがて奈良朝には絢爛たる天平文化が成熟した。とくに和歌の分野では集団歌謡から個性的創作への発展が顕著であった。こういう飛躍的な発展が可能となったのは、日本民族の基本的性格とそれを助成した日本の風土を無視できないことはもちろんであるが、中国大陸から摂取した文化も忘れてはなるまい。

日本は、中国大陸との接触は記録以前からあった。三世紀から五世紀にかけては、国の使いがたびたび行くほどにまでなっていた。とりわけ、七、八世紀には遣隋使、遣唐使が十数回も派遣され、多くの留学生や留学僧が多方面の書籍や中国文物を持ち帰った。また、朝鮮や中国から日本に移住する人も多くなり、なかでも朝廷の文筆を司った漢氏、秦氏などが尊重された。大化改新以後は、中央に大学、地方に国学を設置して、中国の経学、史学、文学を課した。これらを修めた者を官吏に登用したため、漢学がたちまち盛んになり、儒家思想が日本の国民思想に大きな影響を及ぼすこととなった。仏教は推古時代以後、年を追って興隆し、法隆寺や東大寺その他、多くの寺や仏像が造られた。

①『十七条憲法』(鈔録)：一曰：以和爲貴，無忤爲宗。人皆有黨，亦少違者，是以或不順父母，乍違鄰裏。然上和下睦，諸於論事，則事理自通，何事不成？……七曰：人各有任，掌宜不濫。其賢者任官，頌聲則起，奸者任官，禍亂則繁。世少生智，克念作聖。事無大小，得人必治。時無緩急，遇賢自寬。因此國家永久，社稷勿危。故古聖王爲官以求人，爲人不求官。……九曰：信是義本，每事有信。其善惡成敗，要在於信。群臣要信，何事不成？群臣無信，萬事悉敗。

思想方面では、儒学や仏教の他、老荘思想も愛好された。さらに中国の六朝文学なども伝わり、日本上代の文学や思想を豊かにした。それらの大陸文化の輸入のうち、とくに文学に画期的な影響を与えたのは漢字であった。それによって日本人は文学を書き記すことができるようになった。漢字はまた平仮名・片仮名を生んで平安時代以後の仮名文学隆盛の原因をなしたのであった。

二、口承文学から記載文学へ

日本文学の原初は、「うたう」「おどる」「かたる」などが渾然と一体をなす未分化な状態であった。やがて、祭式・宗教的儀礼などにおける呪的な力を持つ祝詞や、農耕儀礼などにおける^{のり}広い範囲の集団的な抒情歌である歌謡、さらに叙事的な語りの神話・伝説・説話などが分立して固有の表現を持つようになった。文字のなかったころ、それらの神話・伝説・歌謡・祝詞などは、土地の住人や専門的な伝承者の語部などによって、口から口へと言い継ぎ、歌い継がれていた。こうした文字によらぬ文学を口承(伝承)文学という。

古代前期の文学は長い年月にわたって口承(口伝え)にたっていた。口承文学は集団から生まれ、集団により味わわれ、また口承であるために流動変化する。漢字を借りて日本文学の記載が可能になったのは、早くても大化改新以後である。八世紀にはいると、国家意識の目覚めに応じて、史書や地誌編集の気運が漲り、漢文体や漢字の音訓を巧みに使って『古事記』『日本書紀』『風土記』が相ついで編纂された。

また一方、漢字使用は流動変化していた従来の文学の性格を一変させ、定着固定した文学の発生を促した。個の自覚は集団的文学に

甘んずることなく、個性的創作に向かう傾向を生み出した。『万葉集』の和歌はその個性的創作の誕生と成熟を示すものである。『懷風藻』の詩も中国文学の模倣は著しいが、当時の教養人の漢詩文に対する積極的な姿勢をよみとることができる。そして宝亀三年(772)、藤原浜成によって撰述された『歌経標式』も最初の歌学書として、後世の歌学に影響を及ぼしている。

上代文学の特性は「明き浄き直きまこと」にある。すべて貴族的官僚の手で編集され、創られたものでありながらも、国家草創期の民族の逞しさや、積極的で飾り気のない生き方や純粋な感情を見せ、生まれたばかりの若々しさと成熟の美しさを備え、後世文学が常に省みるべき諸源泉を湛えているものである。

練習問題

- 一、文字が伝わる以前に、口を通して受け継がれていた文学を何と
いうか。それは記載文学とは、どんな違いがあるか。
- 二、朝廷に仕えて、古い言い伝えを語るのを業とした人を何とい
うか。
- 三、上代文学の文化的背景として、飛鳥文化・白鳳文化・天平文化
の繁栄があるが、その内容と特色をそれぞれ調べなさい。
- 四、古代前期の、中日両国間の文化交流の実態とその成果を探って
みよう。

五、日本現存の仏典の注疏や金石文、聖徳太子の『十七条憲法』などは、みな純粋な漢文で書かれたものである。仏典の注疏や金石文は別として、『十七条憲法』の文学性やそれに含まれた思想を吟味しなさい。

第二節 記載文学の興り

一、神話・伝説・説話

日本文学の発生は、日本語の成立とともに文学以前にさかのぼって考えなければならない。おおよそ古代前期の文学は、神話や伝説や昔話や歴史と相互に密接し融合した存在である。古代の人々はおしなべて、人間の力を超えた自然界や人間界に生起するあらゆる現象を神々の働きのあらわれと信じ、神々を恐れ敬い、その意志やおきてを生活の基準として過ごしてきた。古人の素朴にして自由闊達な想像の世界で、特に神々の活動を中心に天地や人類の創造、国土経営とその発展などを、長い時代をかけて自然発生的に作り上げられたのが神話であり、これから派生したものが伝説や説話である。

神話・伝説・説話は口承文学として、特定の集団や氏族の人々によって、あるいは語部といわれる職業的語り手たちによって、ただ口から耳へと語り伝えられるのみであったから、その長い伝承の間には、おのずから変化成長ないし消滅するものもあった。しかし、三世紀の末ごろ漢字が伝わると、これらが筆録されるようになり、ようやく記載文学として定着した。

日本上代の神話・伝説・説話は、中国のような、諸文献に散見

する方法とは違って、主として『古事記』や『日本書紀』、諸国『風土記』および『古語拾遺』などによって、現在まで保たれてきた。以上の史書や書物ができる際、国家意識の高揚や漢文風の文章で記されたことなどのために、もとの姿を損なった点も多かったのではあるが、日本民族の有する最古の叙事文学として高く評価されている。

神話は宇宙・人類・自然・国家・文化の創造とか生死の起源などを、神格の働きを中心として述べたもので、超自然や超現実的であり、後世から見れば不合理に思われる点が多いが、宇宙その他に関する古代的解釈がこれによって窺われるのである。日本の神話は、意図的な構成を持ち、人代に連続する過去として、『古事記』上巻、『日本書紀』神代紀を中心に記載されている。これらを「記紀」の神話という。この両書は王権の神聖や皇室の絶対的権威を説く政治的性質を共に持っているが、『古事記』のほうは、その性格がより鮮明である。

神話は普通、創世神話、自然神話などと分類されるが、「記紀」の神話は天地のはじめ、国土の生成、神々の誕生、国家の起源、皇統の優越性などが、重点的に記述されており、自然神話にはあまり関心が示されていない。その語るところによれば、皇室の祖先は国土、人民すべての祖先であり、皇室は天地のはじまった時から尊い地位を維持続けているものである。神代の物語が何もかもこの逞しい国家建設の精神に基づいて述べられているので、日本の神話はまれに見る整った体系を持っている。

この体系神話は、次の三段階に分けられている。まずは、高天原^{たかまのほら}の成立と国土の誕生、すなわち天神^{あまつかみ}の命によって創造神たる伊邪^{いざ}那岐神^{なきのかみ}・伊邪那美神^{いざなみのかみ}の二神が活躍する時代。そして、天照大御神^{あまてらすおほみかみ}